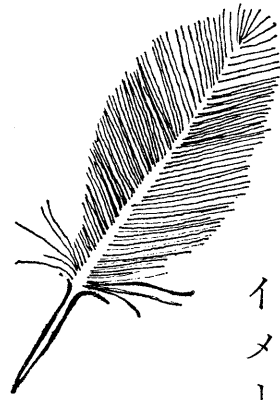


イメージへの散歩



菱川 敦子

幼児と保育者のイメージのちがひ

職員室にいる私の耳に、水がなにかにあたってはじけるものすごい音がきこえてきた。

幼児たちがどんな遊びをはじめたのだろうと、すぐ外の手洗い場へとんでいくと、サントリーの生ビールの金の空樽を置いて、水道の蛇口を全開にして水を出している。水はすごい勢いでその空樽にあたり、上へ五十糎、左右に一米くらいの半円を描き飛沫をあげ、そのそばで

男児二人が、手をたたいてこおどりながら歓声をあげているのである。私からみれば、それはちょうど、舞台上でライトに照らされた色さまざまな噴水の中で、小人が乱舞しているかのようにみえた。私は、「わあー、すごい」。そのあとへ「きれいな噴水」といいそうになつてやめた。それは、今まで幼児と共通のイメージをもつという指導の基本が、あまりにもくいちがう自分であるということが、意識の中にあつたからである。

幼児たちは、そんな私の感嘆の声に、「先生、花火大

会や」と、さも得意そうにいった。その言葉をきいた瞬間、私の心の中は空白状態になり、やがて、「徐々に、やはり、幼児と私のイメージはちがっていた」という、やるせない気持に襲われた。

このように、音、色、形、光など、まわりのさまざまな刺激を受けて生み出される、幼児と私のイメージは全くちがうことが多い。そのため、幼児と深くつきあうほど、私は指導の迷路へさまよっていく自分を意識し、たえず不安定な状態におちこんでいってしまう。

幼児のイメージのひろがり、と保育者の共感

砂あそび場で直径五十糎くらいの大きさにつくった池の上に板ぎれの橋を渡し、その上にのっかって、ままごとのおちゃわんで水をすくっているかのようにみえた男児が、「先生、ちょっときて」と呼びにくる。私は、「御招待ありがとう」という返答を心の中でくり返しながら近づくと、この幼児は、「先生も金魚すくいさせたらか」と、池の中に浮べた赤いバラの花びらをすくっている。

「わあー、金魚がいっぱい」。そして、「バラの花びらを金魚にみたてるなんて、すてき」と、うれしくなった私の心は、前述したように空白状態にならず、さそわれるままに金魚すくいに興じた。私は、「こんなすてきな金魚すくいは誰も思いつくまい」という想いと同時に、あたかも、この幼児と縁日にきて金魚すくいをしているかのように思った。二人がすくった金魚が青いバケツの中の泥水に浮かんでいるのを見てると、もしも、この幼児に呼ばれなかったら、幼児とともに遊ぶことがなかったら、私は、この赤いバラの花びらにどんなイメージを投影していたであろうか。きっと貧しいイメージだったにちがいない。幼児の要求を受容し、ともに遊びに熱中したことで共感することができ、幼児と私のイメージの距離が少しでも近づいたのではないかと、うれしくなった。

愛情はイメージへのかけ橋

新あたらの母はもう二十日ほどで出産日を迎える。そんな母

に甘えられない心の乾きを、この幼児は私にぶっつけてくることが、一日一日とはげしくなってくる。「チャアチャン、チャアチャン」「おっぼ、おっぼ」「私は、赤ちゃん」と背中へとびつくと、そばにいた、奈緒、真琴、しのぶまでが「私も赤ちゃん」「私も」といってぶら下る。こんなときが私のいちばん困るときで、言葉や行動で解決する方法がわからず、ただ幼児たちにもみくちやにされている。やがて新の強引さか、私の気持を察してか、真琴は、「私は十才の中学生」、しのぶは、「私は先生になる」、奈緒は、「私は幼稚園の子」と、あきらめ顔で役割を宣言する。

新は、「チャアチャンとねんね」と、保育室の隅のマットの上へ私と二人でねむる。

奈緒は、「お母さん、幼稚園へいくの送っていってよ」というが、私はなんだか起きる気持にならず、「赤ちゃんおねんねしているから困ったわ」と、逃避するような言葉をいってしまった。「そしたら、赤ちゃんおんぶして送ってくれたらいいのに、そんなお母さんようけお

るよ」と、怠け心を出した私をみすかすような返事が返ってきた。私は、苦笑しながら新をおんぶして、奈緒の手をひいて幼稚園へ送っていくことにした。新は私の背の上でぐったりと赤ちゃんがねむったふりをしている。そんな遊びがつづく中で、新は起きると、「ミルクがほしい」というので、私はとっさの思いつきで、職員室の白いすいとうの中へお茶を入れた。そのときは、すでに、奈緒はお姉さん役の真琴に幼稚園へ迎えにきてもらって帰っていたので、四人の幼児たちは私のあとから赤ちゃんのように這ってくる。お茶を水筒へ入れる間、私のそばで四つん這いになって一列に並んで、赤ちゃんがミルクをのませてもらおうと、まさに口をあけようとして私をみつめている表情をみて、この演ずることのうまさと、そしてかわいさに思わず目がしらがあつくくなる。あとから思えば、奈緒も、真琴も、しのぶも、この時は赤ちゃんになっていたことに、私は、なんの不思議さも感ぜずに、ひとりひとりにミルクをのませていた。しかし、この場合、お茶をミルクにとり私のイメ

ージに、幼児があわせてくれたこと、それはよかったのであろうかという迷路の入口へ立ってしまった。

ともわれ、この幼児たちと保育者の愛情のかけ橋としてイメージも存在し、遊びが進められていくという、私なりの自分勝手な理屈で解消してしまった。

イメージの花のためと野辺へ

幼児のイメージの中に毎日どっぷり漬っていると、ますます不可思議なことに会おう。

ホールの壁面に、私は、二米くらいの大きさの水色の傘をつくっては、細い水色のテープを斜にはって、雨の日の情景を描いたつもりである。その傘の下へ、みどり、順子、美奈、奈緒の四人は、「雨がふってきた。

雨やどりをしようよ」と、肩よせあって雨やどりをして眠っているふりをしている。偶然、こんな場面に出会うと、私は、どんなことが始まるのだろうか、胸がときめいてくる。四人は一分間もたたないうちに起き上り、水色のテープで表出した雨に頭をくつつけて、「シャ

ワーだ、頭を洗おう」と、両手で頭の髪のをかきまわしながら、シャワーの下を走りまわっている。私には、それがまさに劇的なシーンとして目にうつる。セリフを覚えて行う劇的活動より、より劇的な生きたシーンとしてみえるのは、幼児のイメージの自由さからくるものであるうか。そして、このシーンの中で次々と変化するイメージをみていると、ただ不可思議だとしかいいえない。

K・E・ポウルディングは、「イメージは未分化で、もうろうとして動きやすいものでできている」と述べているが、私は、幼児たちをみていると、この言葉がびつたりあてはまるような気がしてならない。さらにつけくわえれば、幼児のイメージは、あの内面の世界につきつぎと咲きつづける、美しい花ともいいたい。

幼稚園という野辺にたゆと、千変万化のイメージの花々、毎日、この中を散歩できる私は、保育者という名をもつ人間としての幸を味わいながら、幼児たちに、どのような返礼をしたらいいのかと思ひ悩んでいる。

(伊勢市立豊浜東幼稚園)